

## 大学の思い出

高橋 古始（教育・昭和58年卒）

大学の四年間は早く過ぎ去ったような気がしている。特に四年生での一年間はとても短く感じられ、学生らしい充実した時期であったように思う。

四年生では西原浩先生のゼミに入り、卒業論文の実験に明け暮れた。卒業論文のテーマは“ビール酵母菌の凝集に関する研究”。今でも間違えずに言える。当時の化学研究室では、各先生方の長期研究の一年分を四年生が担当し、それをまとめて各自の卒業論文としていた。西原先生は教授昇進前で研究にも熱が入っておられ、実験日程は過密だった。前期ではビール酵母菌を培養して細胞表層の濃縮液を作る工程を、日曜日16時から土曜日夜迄の一週間で行い、これを10月末迄ひたすらやった。ゼミ生は二人、もう一人が自宅通学の女性のため、日曜日と夜19時以降の実験は下宿している私の担当だった。

印象に残っている思い出は大きく二つ。一つ目は大失敗して先生に怒られたこと。ある日曜日に友達と遊んでいたが、16時になり仕方なくゼミ室へ行った。ビール酵母菌培養のため、種菌の塊から白金棒で少量の菌を採ってフラスコ内の培養液（40個）へ移す。その都度、白金棒はアルコールランプでよく焼く必要があるのだが……。通常は月曜朝のゼミ室は焼き立てのパンの匂いがする。しかし、この日は臭かった。実は雑菌が混入していたのだ。白金棒の焼きが甘かったのか？酵母菌を移すのが遅かったのか？穴があったら入りたいような気持ちを、今も鮮明に覚えている。

二つ目は教育実習。6月初めから三週間附属坂出中学校へ通った。単位取得には二週間でよかったが、自発的にもう一週間参加した。それは勿論、教育実習が楽しかったから。理科の授業だけに専念できるのだから楽しかったはずである。だが時間的にはきつくて、朝7時過ぎに下宿を出て22時前後の帰宅だった。若くて体力もあったのでまったく苦にならなかったが、授業準備にもたつく実習生達に、毎夜遅くまで付き合ってくれた指導教官の前田先生と田中先生は大変だったと思う。実習中の思い出は多々あるが、その中で一番は“水槽ソーメン”。これは実験後長らく放置していたガラス水槽を洗う目的で、「夜食にソーメンをしよう」という指導教官の提案で始まった。何に使用した水槽なのか？「洗えば大丈夫」と、短絡的な理科の仲間内で気にする者はいなかった。みんなで食べたソーメンの味はとても美味しかった。空腹だった？雰囲気良かった？その後も他教科の実習生も加えて、何度か“水槽ソーメン”をした記憶がある。

卒業後、お世話になった三人の先生方とは度々ご一緒する機会があり、大学時代も含めて良い思い出となっている。